

## 岡崎英彦「本人さんはどう思てはるんやろ」(1) — 「人と人の理解」

びわこ学院大学元教授 元びわこ障害者支援センター所長 遠藤 六朗

### 岡崎、糸賀への応答

糸賀一雄死去2年後に出された「追想集『糸賀一雄』」(1970年)に、岡崎は「この子らを世の光に」が私自身にとって具体的な言葉になるのには、私が先生のたどられた内面的な過程をたどる以外になく、また外への努力をつづける以外にはないと思われる」と書き、糸賀亡き後の自身の決意を述べている。

そして、1987年「びわこ学園だより」新年号に岡崎は、「障害児者にかかわる現場で、『共に生きる』という言葉が使われます。近江学園の歴史からも、確かにこのことが取り組みの鍵になると思われれます。…障害児者自身に、成る程これなら、職員も自分達と共に生きてくれていると納得してもらえ構えが、職員に、施設にできるかどうか」と書き、「40年の近江学園が私の心に座り続けている訳もここにあるようです。施設の在り方はそのまま私自身の在り方なのでから」と不思議な文で締め括っている。その半年後岡崎は亡くなった。岡崎最期のこの一文は糸賀への決意に対する岡崎の応答であったのではなかろうか。

### 「本人さんはどう思てはるんやろ」とは？

糸賀追想で示された岡崎の決意、岡崎はその通り生きたのである。「この子らを世の光に」、糸賀がこの子らと共に生きたからこそこの言葉が生まれたと岡崎はとらえている。そして、この「40年の近江学園」—岡崎の原点としての近江学園とそれを源流としたびわこ学園—に込められた岡崎の思い、その思いは「職員も自分達と共に生きてくれていると納得してもらえ構え」にあり、まさしく岡崎が投げかけた「本人さんはどう思てはるんやろ」と対を成している。

岡崎は自身にこう問うているのかもしれない。「子どもらは自分(岡崎自身)のことをそのようにみてくれるであろうか?」と。ここにいよいよこの糸賀と岡崎自身の応答に込められた思いを繙(ひもと)き、もしそう呼べるとすれば、「岡崎の思想」を紡ぎ出してみたい。

### 岡崎—人間を知る“興味関心”“好奇心”—

岡崎にはもともと「人間を知る」という興味関心、好奇心が旺盛で多方面にわたった。そもそも医者になったが、それよりも「人の生き方を、肉体と心をもった人間という側面から知るため」に医学を学んだ。そして、「人間の生きる様相というものは一つの総合的な営み」であり、それをとらえる場はまさしくその「生きた場」である。びわこ学園の源流となる近江学園医局「杉の子組」の療護児に本領が発揮される。「こうなれば子どもを育てることに徹する以外にはないと覚悟をきめた。そのことのために、小児科学以外のものを勉強しなければならないとしても、小児科学を全く放棄することにはならない。いやそれどころか、大いに必要であるし、勉強も続けてゆくつもりだ」。

この岡崎の姿勢は、始まったばかりの重症心身障がい児療育を推進していく上で重要である。つまり、基礎に人間理解をおいたということ、しかも「分けないでみる」ということにある。

### 「裸のいのち」—人と人の理解—

糸賀は岡崎等の杉の子組の取り組みに敬意を払い、いつぞやこの子らのための施設建設を誓う。そして、この子らは「だれひとりの例外なく、感ずる世界、意欲する世界をもっている。ただ生かしておけばよいのではなく、どのような生き方をしたいのか、思っているかを知り、語り合い、触れ合い、お互いにより高い生き方へと高められてゆくような指導がなされねばならない」(1958)。

それに対して、びわこ学園創設一年後の1964年、岡崎は「裸のいのち」として子どもと向き合うことで糸賀に伝える。その“いのち”のつながりこそが人間関係の最も深いところからの“幸”だという。

障がいの重さという“壁”にどう立ち向かうか、その“壁”に立ち向かうのは子ども自身である。そう岡崎は言う。そして子どもにそれを要求する以上、子どものいのちに向き合い、共にする構えが職員に

(次号へ続く)